

タイトル	追悼のことば
著者	小田，清
引用	季刊北海学園大学経済論集，53(4)： i-ii
発行日	2006-03-20

追悼のこゝば

北海学園大学経済学会長 小 田 清

本学経済学部教授であり、大学院経済学研究科教授を兼任されておられた細見眞也先生は、2005年6月21日夜、研究室において心筋梗塞により急逝され、69歳の生涯を閉じられました。

細見眞也先生は1995年4月、本学教養部（当時）「国際事情」担当の教授として赴任されました。その後、教養部の改組転換・廃止により、1998年4月から経済学部所属となり、一般教育科目として同じく「国際事情」を教えておられました。さらに2003年4月からは、経済学部の新設された地域経済学科の専門科目「発展途上国論」担当の教授として教鞭を執られ、同時に大学院経済学研究科修士課程の「発展途上国論特殊講義・同演習」担当教授も兼務され、10年余にわたって本学ならびに経済学部の発展に尽くしてこられました。

地域経済学科の最初の卒業生を出す2007年3月末を以て退職の予定であり、それまでにはもう少し時間があり、講義やアフリカ研究においても、さらに成果を積み上げるものと期待しておりました。その矢先の突然のお別れでした。先生の研究室はアフリカ研究一色で、関連する書籍や集めた民族用具であふれておりましたが、その集大成もかなわぬままとなりましたことは痛恨の極みで残念の一言です。先生のいつも物静かでおだやかな話し方、笑顔を絶やさない愛情あふれる学生や院生への指導、教職員への対応は、私たちの脳裏から永久に消えることはないでしょう。ここに細見先生の生前のご活躍を偲び、心からのご冥福をお祈りするとともに、先生の教育と研究の足跡を伝えるため、本学経済学会『北海学園大学経済論集』第53巻第4号を細見眞也教授追悼号として刊行し、慎んで御霊前に捧げ鎮魂の意を表したいと思います。なお、このような編集・刊行へのお願いにお応えいただき、年度末のご多忙にもかかわらず玉稿をお寄せ頂きました、細見先生のご友人、同僚の先生方に対し厚くお礼申し上げます。

細見先生の略歴と教育研究上のご功績については、本学に赴任してからの主なものを掲載させて頂きました。本来ならば、この欄で先生の研究業績等について詳細な解説がなされるべきですが、専門外の私には荷が重く、到底その任にはありません。そこで、先生の誰に対しても分け隔てないお人柄とアフリカ研究への熱い想いとが重なり合っている、大変含蓄に富んだ先生の文章を以下に転載し、紹介にかえさせて頂きたいと思います。

細見真也『アフリカの価値観―無文字社会の伝統思想と日本の教育』お茶の水書房、1990年、「はしがき」より。

明治以来、今日に至るわが国の歴史が西欧に端を発した近代文明導入の過程であったことは、誰しも認めるところであろう。この場合、導入の動機がたとえ外発的なもののように見えたとしても、たとえば、わが国の近代医学のほとんどがフランスではなくドイツから導入されたという一事がものがたっているように、そこにわれわれ日本人の内発的な価値判断があったことを否定することはできないのである。

つまり、われわれは、それが結果として定着したか否かは別としても、自らの意思に基づいて、あるいは、その価値観によって西欧近代文明の何をどこから学び、導入するのかを主体的に選択したり決断してきたことを認めざるを得ないのである。そして、こうした主体的な価値判断という内在的自由の行使が、われわれ人間に与えられた普遍的な権利であることはいうまでもない。そのように考えるなら、奴隷貿易とか植民地支配という関係のもとに、少なくとも数世紀にわたってアフリカが西欧の近代文明との接触を続けてきたにもかかわらず、いまなお、ほとんどすべてのアフリカ諸国で近代文明が導入されたとか、それが定着したなどとは言えないとすれば、その非近代性こそ現時点における彼らの価値判断の結果を示している、と言ってもよいのではないだろうか。

すなわち、アフリカの人々は、すべてがそうだとはいえないにしても、西欧近代文明を導入したり採用することが必要なものであるとは判断していないのではないかと考えられるのである。これを端的に言えば、アフリカ諸国が現在の非近代性を脱して近代化への道を選択するには、彼らの価値観そのものが転換しなければならない、ということなのである。したがって、われわれが本当にアフリカ諸国の近代化を望んでいるとすれば、彼らの価値観を把握したうえで、その《誤り》を指摘することにより、その修正または転換を促す以外にないのである。

その意味において、アフリカの価値観を把握したり理解することもなく、その非近代性を指摘してもアフリカ諸国の現状が改善される見込みは、ほとんど皆無であると言っても過言ではないし、そのような調査とか研究がアフリカ諸国の近代化を本当に望んでいるなどとは到底、私には考えられないのである。

そこで、私は、彼らの価値観の誤りを指摘したり、その転換を促すことが可能か否かは別としても、とりあえず彼らの価値観を把握することがアフリカ諸国の近代化を論ずる場合には不可欠の前提であると考え、それを試みてきた。その試みがどれほどまでに成功したか否かは、あくまでも読者の判断にゆだねるほかない。

改めて先生のご冥福とご家族の平安をお祈り申し上げ、追悼のことばと致します。